

明治前期における医学・洋学教育体制の形成とキリスト教界

——岡山県とアメリカン・ボード——

田 中 智 子

目 次

はじめに

一 岡山県における医学・洋学教育の開始

1 医学教育機関の展開 —— 岡山県病院発足 ——

2 洋学教育機関の展開 —— 私立池田学校発足 ——

3 小 括

二 岡山県とアメリカン・ボードの邂逅

1 県病院と宣教医の接触

2 宣教師雇用の実現

三 岡山県下でのアメリカン・ボードの活動

1 岡山伝道の展開

2 ベリーの医療伝道

四 岡山県とアメリカン・ボードの分離

1 民権運動の影響

2 官学医学教育体制の流入

3 雇用主体の変化

おわりに

キーワード

岡山県、アメリカン・ボード、ベリー、医学教育、洋学教育

はじめに

プロテスタント・キリスト教の宣教師は、十九世紀後半の日本に対する伝道の有力方策として、宣教師のもつ英語力や医学知識を活用することができた。各地方人民政府は相手がキリスト教勢力であることを斟酌し、それぞれにその力を利用したり排除したり、と様々な対応をみせた。

一八七〇年代から八〇年代にかけての全国的なプロテスタント・キリスト教界の勢力拡大状況と各道府県における医学・洋学教育体制の整備状況との関係をすべて網羅し、類型化することが必要だが、その準備はまだない。⁽¹⁾しかし、従来の研究に基づいて、一八七〇年以来、最も広範かつ組織的に対日布教を進めた宣教師であるアメリカン・ボードと地方人民政府の関係について、一二つの特徴的な事例を挙げてみよう。⁽²⁾

まずは、一八七〇年代前半の兵庫県におけるアメリカン・ボード宣教師ベリー (Berry, John C.) と兵庫県病院 (通称・神戸病院) との関係である。⁽³⁾ 兵庫県令神田孝平は、中央政府による全国的医療体制の整備構想が始動する以前から、来神したばかりの宣教師ベリーの力を利用して、県内の医療・医学教育体制を整えようとした。すなわち、一八七三年にベリーを神戸病院に迎え入れて西洋医学の導入を図ったのである。同病院は県下医療の中心的役割を果たすこととなった一方、ベリーはその貢献ゆえに、キリスト教の布教を行うことを県令から黙認されており、神戸病院を拠点として周辺地域への伝道活動を展開し、医療伝道の助手を養成することもできた。公権力と宣教師との親和関係をここにもみることができる。

次に目を一八八〇年代後半の北日本方面に転じてみる。一八八六年九月に宮城英学校の名で仮開校した仙台の東華学校は、地元出身の有力者である富田鉄之助や大槻文彦ら仙台造士義会のメンバーが主導して誕生した、私立の洋学

教育機関である。⁽⁴⁾この学校は、彼らの教育構想と仙台にステーション（伝道拠点）を設置したいというアメリカン・ボードの思惑とが合致したところに実現し、宮城県知事の松平正直が理事長を務め仙台区長が敷地を提供する一方で、同志社の新島襄が校長、宣教師デフォレスト（DeForest, John K.H.）が語学教師に就任しており、キリスト教教育が容認されている学校であった。キリスト教勢力であるアメリカン・ボードと日本側の行政府による半官半民的な性格を有する私立学校であったといえよう。兵庫県のように行政府が維持する公的機関に宣教師が登用されるという形態を直接的関係とするならば、これはキリスト教勢力側の私立学校設置に行政府が同調・協力するという間接的関係であるとみなせる。

このように、時期と地域が異なれば、宣教師との関係が直接的か間接的か、彼らの力が必要とされるのは医学領域なのか洋学領域なのかといった違いが生じてくる。その相異の要因を探るために、本稿は前掲二事例をつなぐ時期にあたる一八七〇年代末から一八八〇年代前半に注目し、岡山県における洋学・医学教育体制の形成過程とアメリカン・ボード宣教師との関係を考察するものである。

アメリカン・ボード宣教師は他派との競合を避けて京阪神を拠点とし、やがて西日本および北日本へと活動範囲を広げていった。岡山はその活動先の一つであり、一八七九年に伝道拠点としての岡山ステーションが開設されている。岡山でのアメリカン・ボードの活動については、キリスト教史の立場からの研究蓄積がある。その嚆矢となったのは、一次史料である宣教師文書を用いた一九六〇年代の竹中正夫の研究である。⁽⁵⁾これに続く最近の守屋友江の包括的論考などにより、岡山伝道の実態はかなり解明された。⁽⁶⁾だが、行政府との関係を分析しようとする本研究の立場からすると、総じて従来の研究は、宣教師と個々の宣教師の意図や行動、さらには伝道成果を重視する傾向が強いためか、受け入れ側である府県の意図や動向については、未解明の点が残されているとみえる。府県を国とは異なる独立した主

体として捉える視点も弱い。

以上のように考えると、史料面についていえば、日本側官公庁の史料の精査が必要となる。アメリカン・ボード側に関しても、未解読分の史料——特に、岡山ステーション設立の先鞭を付け、同地開拓の中心的存在として県行政官や有力者と関わったベリーの書簡や回想——を含めて総合的に検討しなくてはならない。⁽⁷⁾そして史料解釈上の問題としては、“government”と表現される英文上の「行政府」が、国を指しているのか県を指しているのかを正確に考定し、外国人をめぐる様々な案件に関する決定権の所在を確認した上で、国、県、地元有力者といった各主体の方針、および相互の関係を分析することが求められる。

県政と宣教師との関係を考える際には、それが生じる以前の歴史的状况を把握しておく必要がある。そこでまず第一章において、一八七〇年代半ばまでの岡山県においては、いかなる態勢下に医学・洋学教育の実現が図られていたのかを論じる。その上で第二章以降において、一八七〇年代半ばから一八八〇年代半ばの時期に、アメリカン・ボード宣教師と岡山県との関係がどのように築かれ、変化していったかを考察していくことにしたい。

一 岡山県における医学・洋学教育の開始

1 医学教育機関の展開 —— 岡山県病院発足 —— ⁽⁸⁾

明治三（一八七〇）年六月、大阪の緒方洪庵の下で学んだ明石退蔵ら藩医層が中心となり、岡山藩医学館が発足した。藩知事の池田章政が医学修業者に対し扶持を給与し、当初からオランダの軍医ロイトル（Ruyter, F.J.A.De）を招聘するなど、⁽⁹⁾蘭医学の摂取に積極的な機関であった。医学館の向かいには病院が設置され、診察も行われていた。

しかし翌年の廃藩置県を経て岡山県の管轄下に置かれると、県の方針の定まらぬなか、医学館は明治五年一月には医学所、七月からは病院と統合されて病院附設の医学所（あるいは医学教場）へ、と改組・改称が続き、一部廃止や人員縮減も行われるなど、不安定な状態が続いた。さらに大きな影響を与えたのが、同年八月に文部省が頒布した学制である。学制体制は、府県の教育体制の統制や一元化を目指すものであった。岡山県では病院及びその中の医学所に対し、維持費として定額三千円を支給していたが、これが停止されたのは、府県に対し学事用の公金支出を禁ずる十月二十八日の文部省第三十八号を受けてのことであろう。存亡の危機を迎えた病院及び附設の医学所であったが、有志はこれを会社病院（民間病院）として維持した。以後約一年余りを、彼らの尽力によって何とか持ちこたえたことが実を結び、一八七三年十一月、文部省の許可を得て岡山県病院が再発足したのである。岡山県自体も一八七三年六月十五日に「医事教育奨励ノ論告」を布達して⁽¹⁰⁾おり、医療発展への強い志向を有していた。一八七五年八月には生田安宅を初代院長とし、病院規則も制定された。この頃には、病院の運営も一応の軌道に乗ったと考えていいだろう。生田安宅は備前藩医の家に生まれ、京都や東京で西洋医学を修めた人物である。岡山藩医学館が創設されると二等教頭に任じられ、廃藩置県後の医学所廃止の危機にも率先して維持に尽力した。一八七〇年代末まで、この機関は彼の主導性の下に動いたと考えられる。

2 洋学教育機関の展開 —— 私立池田学校発足 —— ⁽¹¹⁾

明治四（一八七一）年一月に岡山藩は洋学所を設置した。兵学館から選ばれた生徒に英仏語学や士官術学を受けることを目的にした機関であり、イギリスからオースボン（Osborn, P.）を招聘して語学教育にあたらせた。⁽¹²⁾一方、寛文三（一六六六）年以來の歴史をもつ藩学校においても、廃藩置県後に岡山県の学校督事に就任した西穀一らが学校

からの漢学者締め出しを図るなど、徹底した洋学機関化が断行された。明治五年一月には、藩学校は普通学校と改称され、洋学所もここに吸収された。前節に述べた医学所も普通学校付属と位置付けられた。つまり、県下の高等教育施設をすべて普通学校として一本化し、総合教育機関とすることが目指されたといえよう。普通学校は、東京や大阪の高等専門教育機関への進学のための予備教育を施す学校として、語学中心のカリキュラムを備えた組織であった。ただし西の改革はあまりに急激であり、彼には独断専決であるとして減俸の罰則が課されている。

続く明治五年八月の学制発布は、医学教育の場合以上に、普通学校の行く末に対して大きな影響を与えた。学制と同時に発布された文部省第十三号は、府県が設置した学校を一度全廃することを求めるものであった。旧藩時代より外国人教師を雇い入れてそれぞれに府県が設置してきた学校は特例として存続が認められたが、これも十月十七日の文部省第三十五号により、全廃を言い渡された。これにより、岡山県の普通学校は廃止の対象になったのである。

だが、藩校の系譜を引く普通学校を閉鎖するに忍びなかった関係者は、何とかエリート養成機能をもつ学校を維持しようと努力した。まず翌一八七三年一月には、普通学校は第一中学区一番小学兼教員仕立所と称し、教員養成機関としての存続を目指した。だが、十月には文部省督学局より廃止を命じられてしまったため、普通学校出身の小松原英太郎をはじめとする有志は、その校舎を引き継いで、十二月に私立の遺芳館を設立した。⁽¹³⁾ 県下および他府県の英学者・仏学者を教師とし、普通学校同様に高等教育機関への進学予備教育機関となることを目指した学校であった。

県は一八七四年六月、新たに岡山県温知学校を発足させ、これを教員養成機関とした。この学校が一八七六年四月、中学生養成所を附設した岡山県師範学校となり、変則中学校の扱いを受けていた遺芳館は、実質この学校に吸収されて消滅してしまった。しかし、高度な洋学教育を継続したいという意志は失われることがなかった。一八七七年、西毅一は、岡山県の宣教師招聘のキーパーソンとなる中川横太郎とともに、大阪・京都を経て上京、勝海舟、副島種臣、

福沢諭吉、中村正直を訪ね、海路四国に渡って板垣退助と面会した⁽¹⁴⁾。彼らとの交わりに刺激を受けた両者は、約二ヶ月の旅から戻ると、旧藩主池田章政の資金を元手に、普通学校出身者の杉山岩三郎（中川の弟）・青木秉太郎・大口精義らの協力や醸金を得て、私立池田学校を発足させた。この学校については従来知られるところが少なかったが、県の公的報告により新たに判明するところでは、設立は一八七七年十一月、場所は中川が所有する岡山区西川の元瀧川一進居住地で、一八七九年二月時点において月謝は二十錢以上一円以下と定め、生徒百三十六名を有していた⁽¹⁵⁾。

以上にみたように、県による公教育機関は教員養成・中等教育機関として新設され、旧藩以来の洋学教育は旧藩主の資金を元手とした新設の私立学校によって引き継がれることとなったとまとめておこう。

3 小括

以上から確認すべきは、岡山県においては、①公教育としての医学・洋学教育には、旧藩時代に培われた底力があったこと、②中央政府の構想する学制体制に翻弄され、県の既設学校は廃止の危機を迎えたものの、学校当事者あるいは県により、公立と私立の間を行き来しながら存続の道が模索されたこと⁽¹⁶⁾、③結果として、医学と洋学とは異なる道をたどった、すなわち、医学機関は県により維持され、洋学機関は私学として維持されたこと、の三点である。

③の差異の原因は、まずもって政府の方針が異なったことに求められる。例えば学制体制の始動に伴い発布された前述の文部省第三十五号は、外国教師を雇入れる学校の全廃を府県に命じるものであったが、医学校については、病院に改組した上で雇外国人医師に治療法を質問するという形態で存続することは許されていた。学制による統制は、医学教育よりも、洋学を主とする教育に対し、より強く及んでいたといえる。

しかし、ここでの公立と私立の区分は、実態としては明確なものではなかった。私立池田学校が、創設の翌月から

師範学校兼中学校教頭の能勢栄を嘱託に採用していることは注目に値する⁽¹⁷⁾。公職にある者が私立学校教員を兼ねているのである。江戸の幕臣の家に生まれた能勢は、一八七〇年十月よりアメリカに留学してオレゴンのパシフィック大学等に学び、県からは翻訳著述編輯の仕事も命じられていた。おそらく私立池田学校は、高度な洋学教育を実現すべく、洋書を用いストープ付きの教室で授業をしたという能勢に目を付けたのであろう。池田学校は、教員を共有したという点で、公立学校と不即不離の状態にあった。一方県病院も、次章で触れる一八七五年の外国人雇用に際しての契約内容をみると、契約主体は県でありながら、給与を有志の醸金によってまかなうとしていることが目を引く。病院の財政と運営が、有志組織である会社病院的な性格をまだ強く有していたことがうかがわれる。すなわち、一八七〇年代における公・私との教育機関は、人員的にも財政的にも未分化な側面を有していたということである。こうした状況下に、岡山県とアメリカン・ボード宣教師との関係が始まることとなる。

二 岡山県とアメリカン・ボードの邂逅

1 県病院と宣教医の接触

両者の出会いは、まず医学分野において始まった。

一八七四（明治七）年、県病院の医員は、ロイトルに代わる外国人の雇用を改めて構想した。県に宛てた上申書では、外国人教員の招聘は「我が県政令ノ他ノ諸県ニ卓絶セルヲ知ラシムル」先進的事業と捉えられ、「内ハ以テ満県ノ医俗ヲ感喜セシメ外ハ以テ坂府以西崎陽ニ至ル間ノ学校及ビ病者ヲ欣慕蝟集セシムルニ足ランカ」と、県内医学の向上のみならず、官立医学学校の存在する大阪と長崎との間における医学の中心機関となろうという大望が述べられてい⁽¹⁸⁾

た。実際、一八七四年の時点で外国人医師を抱えていた西日本の府県立病院は京都府療病院・兵庫県病院（神戸病院）のみであり、全国的に見ても東京府病院・神奈川県（19）の十全病院・新潟県の新潟病院・石川県の金沢医学校・長崎県の病院、と大半は居留地を有する地域の病院であった。

ところで岡山県の東隣の飾磨県では一八七四年四月、神戸を本拠地として活動するアメリカン・ボード宣教医ペリー（20）の指導の下に、有志が温知医学会と称する組織を結成して会社病院（民間病院）を設立していた。この会社病院はペリーとの雇用契約を交わし、新たに来日してきた宣教医テイラー（Taylor, Wallace）も往診に訪れていた。岡山県病院の医師らが飾磨県におけるペリーの活動を知ったのは、ペリーが医療伝道活動のかたわら、様々な症例と治療法を『治療録』としてまとめ、広く頒布していたことがきっかけでもあろう。外国人招聘を切望する岡山の医師たちの白羽の矢は、アメリカン・ボード宣教医に当たった。彼らは飾磨県の会社病院に対して両宣教医を招くことの可否を問い合わせ、翌一八七五年一月、会社病院側から病院の現況を紹介し来訪を促す回答を受け取っている（21）。

宣教医テイラーが岡山を訪れたのは一八七五年四月のことであった。彼もペリー同様に医療を通じて内陸部に別のステーションを設置したいと考えており、岡山の医師たちとの連絡が始まっていた。ここで医療伝道歴の長いペリーではなくテイラーが当事者となった理由は不明であるが、ペリーは神戸病院での恒常的勤務をはじめ、兵庫・飾磨両県での医療活動の要であったので、後から神戸ステーションに着任したテイラーが岡山の担当というかたちになったのではないか。テイラーは数名の医師と岡山県中属中川横太郎（22）の訪問を得、中川の尽力を通じて内地旅行免許を入手し、岡山旅行を実現したのである（以下、Taylor 1875.6.14）。岡山は居留地周囲十里以内という遊歩区域の外にあるので、入岡には内地旅行の許可を得ることが必要であったから、県吏の関与は当然であろう。外国人の内地旅行については、一八七四年五月に制定された外国人内地旅行允準条例において、遊歩区域外への内地旅行を許可される特例

者のうちに、招聘された開港場の医師が挙げられており、テイラーの岡山訪問はこれを適用したのではないかと考えられる。

岡山入りしたテイラーは、参事の石部誠中や権参事の西毅一らに迎えられている。⁽²³⁾ 西はすでに聖書を読み、少なからぬ関心を寄せていた。テイラーは西の自宅にて高官を集め伝道集会を開き、マタイ伝一章を扱って聖書の話をしてみた。すると全員が、中国語訳の聖書や日本語訳の新訳聖書、あるいはトラクトをもっていたのである。宣教師来訪以前に聖書への関心が引き起こされていたことはテイラーにとって驚きであったが、岡山からアメリカに留学中に受洗して帰国した青年を通じて、聖書への関心が培われたのではないかとみている。断定はできないが、この人物は帰岡後すぐに死んだということなので、一八七〇年に華頂宮に随行して渡米し、ニューブランズウィックに在任の後、一八七四年に帰国、四月に病死した岡山県大参事の土倉正彦のことかと推察される。⁽²⁴⁾

テイラーは他方で、医学修行のため神戸に滞在中、妻とともに神戸教会員となった大田源造が郷里の岡山に戻ってきていたことを知った。大田は友人らに聖書を読み聞かせ、二人の帰依者を生み出していた。聖書に関心を持つ県高官らとのつながりはなかったので、テイラーは自分が去った後は西宅での集会を大田に担わせるよう取り計らって、はじめの岡山訪問を終えたのである。

ところで石部や西らは、当初からテイラーを県病院に招きたいと述べ、そのために中央政府から居住許可を得ることも告げていた。府県の外国人雇用については、主務省である内務省および外務省から許可を得る必要があったため、早速稟請がなされ、八月になって外務省より雇用免状と神戸との往復に必要な寄留証票とが交付された。⁽²⁵⁾ 免状には月三十円の給与で期間は九月より六ヶ月という契約内容が記されていたが、これは病院長の生田安宅らが神戸に赴いてテイラーととり決めて申請した草案どおりである。認可が得られないのではないかとこの県高官やテイラーの懸念に反

して、中央省庁はこれを認めたということになる。

テイラーとの契約は、前年に飾磨県の会社病院がベリーと交わしていた約定を参考にして提示されたと思われる。飾磨県の会社病院は、期間は七ヶ月、給与は十日ごとに二十五円という条件でベリーを招いていた。これは、活動拠点を神戸に置くベリーが内地旅行の範囲内で訪問することを可能にしようとの意図に基づいていたに違いない。岡山県病院も同様に、テイラーの岡山移転が実現するまでの暫定的契約と考えていて、月三十円・六ヶ月という条件には、毎月一回訪問して十日間滞在してくればよいという意味を読み取ることができる。この金額は、テイラーと二人の助手の交通費をまかなえる額であった。岡山県は、国への申請の通りやすさや、テイラーの側の事情が整うまでの時間を考えて、飾磨県会社病院とベリーとの契約同様の、内地旅行的な契約を暫定的に結ぼうとしたのではないか。であるから、妻子の居住も雇用免状に含まれていなかったのである。

テイラー自身も、岡山伝道に積極的であった。居住が認められなくても内地旅行というかたちで関係を続けたいと考えており、七月にも神戸教会員の鈴木を伴い岡山を再訪し、伝道集会を開いている⁽²⁶⁾ (Taylor 1875.10.2)。だが、中央省庁からの承認を得られたにもかかわらず、テイラーと岡山県の契約は十二月に解除された。その理由は、新島襄による同志社設立の動きによって、神戸の宣教師たちによって京都にステーションを新設する計画が本格化し、限られる神戸ステーションのスタッフのなかから、テイラーが京都に派遣されることになったことにある。同志社設立に伴う京都ステーションの開設は、日本ミッシェンとしても重要かつ高い可能性の見いだせる事業である。テイラーが岡山を気にかけて、ボストンの本部からの宣教師増派を望みつつも、京都赴任を第一義に考えたことは不思議ではなかった。

ところで同志社の誕生した京都においても、一八七二年以来、府が近代病院としての療病院を発足させていた。そ

して、テイラー招聘を企図した岡山県病院と同時期に、類似した動きを見せていることに注目できる。京都療病院は、一八七二年からドイツ人医師ヨンケル (Junker von Langegg, F.A.) による教育を実現しており、岡山県病院と同じく早くから外国人医師を登用していた府県病院であった。このヨンケルが一八七六年に解雇されることとなった折、兵庫県と飾磨県で医療活動を繰り広げるアメリカン・ボードのペリーに対し、後任に就任する話が持ちかけられた。⁽²⁷⁾岡山山の医師らと同様、京都療病院の医師たちはペリーの『治験録』を手にしており、彼の先駆的働きを知るなかで、雇用の話が持ち上がったのであろう。居留地を持たず外国人との接触機会が容易に与えられない京都府と岡山県とが、阪神間に展開するアメリカン・ボードの宣教医に等しく目を付けていたのであり、図らずも両府県の間では、アメリカン・ボード宣教医の争奪戦が繰り広げられていたことになる。そして兵庫県も含め、宣教医の登用を図るという方策は、医療の充実に積極的な府県病院における共通現象であったと認識しておこう。

だが京都でのペリー雇用は実現しなかった。現場の医師らの意向に反し、榎村正直府知事に率いられる京都府当局が、ペリー雇用には積極的ではなかったのではないか。ペリーは兵庫県において、神田孝平県令の保護の下、神戸病院を拠点とした医療伝道を数年間にわたり実施してきたところであり、その成功には県令の主導性と保護とが欠かせぬものと考えていた。それゆえペリーとしても、京都療病院からは高額の給与を提示されていたけれども、神戸での環境を失ってまで京都に赴任することを決断できなかつたのだろう。

京都府と岡山県の事情を比較してみよう。従来、アメリカン・ボードと岡山県を結びつけた人物として、中川横太郎の働きは常に指摘されるところである。しかしアメリカン・ボードとの関係は中川一人の感性和行動が生み出したわけではなく、石部・西などを含む複数の県高官が有するキリスト教への親和的態度と期待に支えられて始まったと考えられる。こうした協力者層が京都府には未だ存在していなかつたといえよう。

なお、テイラーとの契約が解除された後の岡山県病院の動向であるが、翌一八七六年四月に公立病院と改称されたのは、同月の内務省達乙第四十三号が、各府県下の病院に官立・公立・私立の区別を求めたことに対応している。同年ここに医学教場が設置され、六月には若栗章を第二代病院長に迎えた。若栗は福井藩出身の軍医で、海軍医学教師であったイギリス人アンダーソン (Anderson, W.) の教えをおそらく受けたものとされている。⁽²⁸⁾ 彼を招いたのは、テイラー招聘にも関与していた初代院長の生田安宅であった。西洋医学に通じた高いレベルを有する日本人医師の招聘により、外国人医師による教育が実現しなかつた穴を埋めようと考えての方策であったと捉えられる。

2 宣教師雇用の実現

一八七五年段階における岡山県病院へのテイラー登用は、結局軌道に乗らないままに終わったが、一八七八年末にいたると、岡山に派遣されたアメリカン・ボードの諸宣教師と県内諸機関との間に本格的な雇用関係が実現することとなった。そしてそれは、医学に加え洋学領域にも広がった。背景には、岡山県とキリスト教界双方の状況変化がある。

岡山県側の事情としては、一八七五年十月に高崎五六が県令に就任したことが大きい。薩摩藩出身の彼は、地租改正断行のために県庁職員を一齐に罷免するなど、県機構を刷新するところから近代化政策の実現に努めた県令であった。一八七九年に入ると、民立の勸業博覧会開催、県庁舎の新築、山陽新報の発刊、第二十二国立銀行の設立など、種々の振興策を展開している。後述するように、こうした一連の施策のなかに宣教師の登用も位置付けられるであろう。

一方キリスト教界の全体的動向としては、一八七七年に京阪神の諸公会(教会)が日本基督伝道会社を結成したことで、日本人による諸地域への伝道活動が本格化したことが注目される。同志社出身者の活動が活発になるものこの

頃からである。一八七七年に入ると、三月にテイラーが金森通倫と岡山を再訪し、続く五月には中国・四国方面への伝道旅行の一環としてアッキンソン (Atkinson, John L.) が横山 (二階堂) 円造・小崎弘道とともに来岡するなど、神戸在留のアメリカン・ボード宣教師と同志社学生による継続的伝道が始動した。

岡山を訪問したテイラーやアッキンソンは、新たな協力者を得る (以下 Taylor 1877:5-19, Atkinson 1877:9-4)。それが前述した師範学校兼中学校教頭の能勢栄であった。能勢とキリスト教との関係は従来不問にされてきたが、アッキンソンによれば、フォレストグループの組合教会員となり、在米日本人留學生によくみられたように、洗礼まで受けたという。能勢を通じて、テイラーの開いた集會に師範学校 (“normal school”) の教師や生徒が集まってきた。能勢は偶像を公然と焼き捨てるなどの過激な行動に走り、仏教徒をはじめとする人々の反感を買っていた。そのやり方には宣教師も首をかしげるところであったが、まずは有力な伝道上の味方とみなされた。彼はアッキンソンに対し、クリスチャンの妻を得たいので紹介してほしいと告げたという。

この時期のアメリカン・ボードでは、西日本方面への新ステーションの開設に向けて、神戸ステーションの宣教師が、方々への視察を計画しつつあった。その中心にあったのはアッキンソンで、一八七八年春にも、バローズ (Barrows, Martha J.)、ダッドレー (Dudley, Julia E.) と山田良齋を伴い中国・四国旅行を行っている。新ステーション開設には、宣教医の存在が欠かせなかった。なぜなら、神戸でのベリーの活動を通じて医療伝道の有効性は認識されるところだったし、外国人が遊歩区域外に定住するためには現地での雇用関係を結ぶことが必要な状況の下、医師としての契約の実現性が高かったためである。そこで十一月、候補地視察のためアッキンソンは宣教医のベリーを連れて神戸を旅立つことになった (以下 Berry 1878:11-4, 11-20, 12-23, SR-1 1879:6)。⁽²⁹⁾ そのとき彼らは、すでにアッキンソンが知遇を得ていた中川横太郎と偶然と出会った。その夜の話し合いで宣教師らの医療伝道構想を聞いた中川

は、岡山県下の医療のためにペリーを招聘することを考えついたという。三年来、公立病院にテイラーを雇い入れる構想は実現しなかったが、アメリカン・ボードと同志社学生による岡山伝道が軌道に乗り、新伝道地開拓に熱意をもつペリーと出会ったことで、中川はいよいよ宣教医招聘の期が熟したと判断したのでろう。

神戸ステーションの宣教師は、岡山を西日本方面の新ステーション建設地に決定していたわけではない。具体的候補地として松山や福岡、広島も挙がっており、宣教師のなかには福岡を推す者も、ペリーのように広島を推す者もあった。だが、県の協力を得て人々から好意的に迎えられる見込みのあった福岡では、主導的立場の人々との連携がうまくいかなくなり、加えて広島訪問が嵐のために中止になってしまおうという偶然も重なった。その一方で、以下に述べるように協力者を得て県への受け入れ体制が着々と整った岡山が、目下のステーション建設地に選定されたのである。

岡山に到着したアッキンソンとペリーは、医師や町の有力者らと面会し医療事業への協力の約束を得た。これら協力者名はわからないが、彼らは五百ドルの資金提供や家屋敷の確保を申し出、県 ("government") に雇われるのではなく私立病院を設立するようペリーに勧めたという。中川はさらに、アッキンソンやペリーを県令高崎五六にも引き合わせた。高崎は彼らを歓迎し全面的協力を申し出、病院をもち好きなように場所や規則を定めてよいと述べると同時に、ペリーが同伴する宣教師を県の師範学校の教師として迎え入れたいと発言した。師範学校は、当時三十五名の生徒を有しており、ペリーによれば、能勢も宣教師を学校に招きたがっており、学校にキリスト教を浸透させる希望をもてた。福岡を回り神戸に戻ったペリーは、すぐにケリー (Cary, Otis) とペティー (Petree, James H.) を伴って岡山を再訪した。すると、新たに両者に対しては、前章に述べた私立の洋学機関・池田学校で雇用するとの話が持ち上がったのである。

ここまでの経緯よりわかることは、宣教師たちの前には、医療・洋学の両分野において、岡山に県雇として居住す

るか、それとも私雇となって居住するか、という選択肢が示されていたということである。そして結果として宣教師らは、医療分野においては公立病院に、洋学分野においては私立学校に、それぞれ雇用されることとなった。この対照的な決定にいたる当事者の意向を、限られた史料より推測してみよう。

まずペリーは県の公立病院雇となった。彼にとつて、有志による私立病院を新設するよりも、安定した基盤とそれなりのレベル・規模を保つ既存の公立病院で働くことが現実的であったといえる。神戸時代の医療伝道は公立の神戸病院を拠点とすることで発展し、それは県令神田孝平の裁量下に可能であったという揺るがぬ理解が彼にあったことは間違いない。それゆえ、新たな開拓地岡山においても、県令の庇護が得られるならば、神戸病院同様に公立病院を拠点化できるとの見込みをもっていたと考えられるだろう。

対する高崎県令の側は、むしろ県下医療の充実を期して、中核医療施設である公立病院へのペリー登用を図ったということであろう。さらに、一連の県政刷新政策のなかで、病院の改革を課題視していたという事情がある。一八七八年四月、財政的問題から公立病院に県の衛生掛員が派遣され、勤務状況を管理しようとした。これに対して病院内の医員が県に陳情して抵抗したために、掛員の派遣は頓挫してしまっ(30)た。つまり県と病院との関係は良好ではなく、病院は、着任早々県官の更迭・再編成を断行した県令が手をつけられなかった領域として残っていた。高崎がペリーに寄せた期待の一つは、彼を通じて病院に対する県当局の優位を確立することにもあったのではないか。

ペリーは一八七九年四月一日をもって公立病院と契約を交わしたが、全十二条から成る条文において、「顧問」(“Adviser”)と呼ばれる役職が示された(Berry “Translation” 1879.5カ)。その任務は、県令や病院職員の要請に応じて、寄せられた質問に対して説明し、病院職員に助言を与え、患者を看護し、生徒を教授することとされた。給与は年二百円、仕事の時間や曜日は特定されないが、要請があればいつでも義務を果たすことと記されていた。仕事以

外で他所に赴く場合は、病院に行き先を告げ、県令の許可を得ることが必要であった。条文は、病院規則や教授規則は県令によって定められ、顧問については、助言は求められるが決定権はないとうたっている。しかしベリーは、県当局が、アメリカのキリスト教病院にならって自分が提示した運営規則を二年間は守ると約束したという (Berry 1878:1223)。ベリーについては、神戸病院同様の裁量権が約束されたと捉えられる関係であった。

一方、ケリーとペティの雇用の背景には、県と地元有力者との間の緊張関係があった。西や中川らは元県官吏でもあったが、岡山における士族民権運動の旗手でもあった。一八七八年五月には愛国者再興を目指す板垣退助が岡山を訪ね、西や中川のほか、青木秉太郎、杉山岩三郎など池田学校と関わりを持つ面々が顔を合わせている。翌年三月には中川やその食客長田時行が板垣を訪問する。⁽³¹⁾すなわち宣教師雇用が画策されているのは、ちょうど民権運動下に彼らが激しく行動している時期にあっていた。高崎県令は、同三月に開設された県会における議員の国会開設運動に停止命令を下すなど、県下の運動には敏感に対応していた。ベリーによれば、ケリーやペティに非常勤での英語教師の話をもちかけた“educational group”の一部リーダーは、反政府運動家としての容疑下にあり、高崎はベリーに対し、宣教師が彼らにくみして私雇関係を結ぶのならば、公立病院に雇って協力することはできないと告げていたと⁽³²⁾いう。彼らが伝道集会を隠れ蓑として各地で反政府演説を行うために宣教師を雇うのではないかとの警戒心も抱かれていた。この“educational group”とは池田学校関係者たちを指すと考えられる。そして、前章末に指摘した公立と私立とのあいまいな境界が、民権運動下に明確なものへと変化している様を確認できる。

結局二人の宣教師は、県令や校長も望んでいた師範学校ではなく、私立池田学校への雇用となった。その理由は、池田学校の発展を期した西や中川の熱意が勝ったことであろう。県令が危惧した池田学校の民権運動的性格のほどは不明であり、西らの宣教師雇用に含むところがあったかどうかもわからない。しかし、一年前にアメリカ帰り

の能勢を教師に招いたほどであるから、西らにとつて宣教師の来岡は、教育レベル向上のためのまたとない好機とみえたはずである。対する県令の側は、中央政府との関係上、宣教師を公教育に登用することに躊躇があったのかもしれない。一八七五年十一月三十日の府県事務章程（太政官達二百三）によれば、学校教師としての外国人雇入は府県が専決でき、主務省に届け出ればよかつたはずだが、空洞化していたとはいえ明治三年六月十四日の文部省達第八十七号以来、教員に宣教師を登用することは一応禁制下にあつたからである。近代化のため外国人を県下に呼び寄せることを第一義に考えた県令は、あえて池田学校による随伴宣教師の雇用を阻止しようとはしなかつたものといえよう。

しかしこの雇用をめぐることは、今ひとつの緊張関係が存在していた。それが、県と国との関係である。一八七七年三月の太政官布告第二十七号により、外国人を私雇して居留地外に居住させるには、地方官の添書をもつて外務省へ伺い出て許可を得なくてはならず、ペティイとケリーの雇用は難航した。一八七九年一月、学校委員の大口精蔵と西毅一の他、戸長の鈴木光耀、成瀬久徴の名を揃えた雇入願を受け取つた岡山県は、この両者に関する雇用許可を申請したが、外務省からは以下五点についての釈明が求められた。³⁴①雇主とされる西毅一と大口精蔵は、どれほどの規模の家屋の所持者なのか。彼らが外国人を雇うのでなく、実態は逆で、米国人が別の場所で彼らを雇用しているのではないか。②実際の池田学校は米国人の開設した学校であり、諸経費も米国人が支弁しているのではないか。米国人教師が英語学を教授するとは名ばかりで、宗教を教えるために来たのではないか。③学校はどこで開設しているのか。米国人の居住する中川横太郎の家屋については、雇主ではなく米国人が家賃を支払っているということはないか。④学校は以前から開設していたのか。それならば幾人の生徒が就学しているのか。新設なのであれば、米国人を二名も雇うとは、多くの就学を見込んでいるからなのか。⑤給料は生徒の月謝から支払うとあるが、一人も生徒がない場合は給与を支払わないつもりなのか。

これらの疑念はすなわち、池田学校に実体はなく、ペティーとケリーが外国人取扱規程に反した滞在を企てているばかりか、キリスト教布教のための隠れ簗として池田学校の名を用いているのではないかと懸念したものだといえる。

実際、外務省の懸念は的を得ていた。学校委員らと宣教師との間では、将来的に同志社（"Kyoto School"）に似た規則を取り入れ、早晚クリスチャンスクールにするという話も出ていたのである。もし反対があった時には、学校の理事の一人、杉山岩三郎が東京から戻ってくることを契機に、教鞭も執る西を校長として独立した学校を作り、後で二つを統合できればという話もあった（Cary 1879.1.22, Berry 1879.2.11）。彼らが池田学校のクリスチャンスクール化をどの程度本気に考えていたのかはわからず、リップサービシ的な将来構想であった可能性もあるが、少なくともその姿勢は宣教師たちに大きな期待を抱かせるのに十分であった。

杉山や西が東京にて奔走し、三月に外務省からの認可が通知されて、宣教師雇用は実現にいたった。宣教師自身に對しては、すでに前年末に西と中川が神戸を訪れて一八七九年一月二十日からの契約を交わしていた（Berry 1878.12.23, 1879.1.7）。全十条、給料額は明示されず、生徒からの月謝をもって充てると記されている。ペリーが公立病院と契約することで、五年間の県との公的関係を維持し、かつ神戸時代の医療伝道スタイルを続け、ペティーとケリーは私立学校と契約を交わして滞在の根拠を得て活動する。宣教師たちにとっては望ましい契約形態であったといえる。

なおペリーは、新ステーションには「訪問看護婦（"Visiting Nurse"）」として若い女性を同伴することを以前から希望していたが（Berry 1878.11.4）¹⁶、すでに京都に着任し、一八七八年一月から二年間の雇用契約を新島襄らと交わしていた女性宣教師ウィルソン（Wilson, Julia）¹⁷がその役に選ばれた。彼女に對しても、岡山の七十名ほどの生徒を抱える女学校校長から、聖書を使ってよいので学校で働かないかという打診があった¹⁸というが（Berry 1879.1.7）¹⁹、結局はペリーの家族という扱いで来岡したようである。

三 岡山県下でのアメリカン・ボードの活動

1 岡山伝道の展開

こうしてベリー・ケリー・ペティーの各夫妻とウィルソンの七名から成るアメリカン・ボード岡山ステーションが充足した。一八八〇年十月には西田町に岡山教会が設立され、初代牧師には岡山伝道に深く関わってきた金森通倫が就任した。宣教師や日本人信徒が行った伝道の概況は竹中や守屋の先行研究に詳しいので、ここでは県側の協力者に即してその動向を整理していこう。

岡山伝道の特徴は、高崎県令の積極的な協力の下に進められたことにある。そもそも先にみたように、中央政府との折衝により池田学校への宣教師雇用を実現し、宣教師定住の道を開いたことは、県の苦勞の賜物である。さらに、やがて岡山教会敷地となる宣教師仮宅も、高崎県令が息子のために立てた旧武家屋敷街の別邸を提供したものであり、高崎は教会設立式には区長太田卓之らを伴って臨席してゐた (Cary 1880.10.23; Berry 1879.5.29)。同月の安息日学校開業式にも、大書記の津田要、高津暉警部課長と顔を並べている。⁽³⁶⁾ やがて県令の斡旋で、新たに旧藩主庭園の一角、東山偕楽園に三棟の洋館が新設され、宣教師たちにあてがわれた。また、伝道上の助力となったのは、県令高崎が周辺町村に対して、宣教師集会に関する特別の許可は必要はないと布告し集会の妨害を防いだことである。県令や区長は、『天道遡源』や『七一雑報』を公立学校に備え付け、公教育へのキリスト教伝播にもやぶさかではなかった (SR 1880.5, Cary 1879.12.5)。

岡山の宣教師らは、京都や彦根で伝道する宣教師を通して伝わってくる他の地方行政政府の態度と比べても、高崎県令による厚遇は驚くべきものであり、中央政府との摩擦を引き起こしかねないほどだと認識している。彼のキリ

スト教への傾倒は、新聞上の風刺対象となるほど際立っていた (Cary 1880.8.16)。

宣教師に求められるのは福音だけでなく、進歩しつつある新生日本が求める多くの施設の設立であるとベリーは認識していた (Berry 1879.5.29)。そのとおり、高崎県令は、病院対策をはじめとする県近代化政策の一環として宣教師に協力的な態度を示したのだといえる。しかし彼は、県民の品位や不道德を嘆き、物質的な繁栄と外面的改善に終わらない、底辺レベルからの改革が必要であるとも考えていた (Cary 1879.10.1)。自身も金森を招いて聖書講義を聴き、家族は教会に出入りしていたという⁽³⁷⁾。ケリーの指摘するように、高崎のキリスト教への接し方には中川の影響が強かったから、彼自身の確固とした考えと捉えることには留保が必要である。しかし高崎が、内面的近代化への関心からキリスト教こそが道徳性を実現すると考え、期待を寄せていた側面があるとはいえるであろう。

中川横太郎は一八七七年、西毅一との東京・高知漫遊から岡山に帰る途中、神戸で演説する新島襄に出会っており、その後京都の新島宅を訪ねるなど、すでに新島との親交をもっていた⁽³⁸⁾。その新島が一八八〇年二月に来岡、中川とともに高粱伝道にも出向き、岡山では西のほか県内有力者と面会、西のような県の人望家が信仰を得たならば、県下の人民の幸福だと述べている⁽³⁹⁾。

西や中川らが育てた池田学校は、一八八〇年一月に旧藩主よりの学資金が停止されたが、西がこれを引き継いで三月に私立原泉学舎を創設、自身も漢文を担当するとともにケリーやペティの雇用も継続した⁽⁴⁰⁾。一日一時間の英語の講読や会話を受け持ったケリーは、将来のエリート層と触れ合える機会であること、聖書の話を含む教科書を用いることができること、メリットを見出ししている。また宣教師の私宅での英語教授や神学教授も行われた (Cary 1879.5.10, SR-2 1880.5)。

先述のように県令と民権家との間には対立関係があったが、宣教師の家は、両者がしばしば足を運び、そのときだ

けは論争をやめて神のことを話す場となっていたとベリーは述べている (Berry 1881.1.29)。文明をもたらす宣教師に對する好意は、両者の共有するところだったのである。

2 ベリーの医療伝道

では、公立病院を拠点としたベリーの医療活動はいかなるものであったか。先行研究に新たな知見を加えて叙述する。⁽⁴¹⁾

一八七九年五月、ベリーは着任早々に人事の刷新を行った。ベリーは市内から六名の医師を選んで新たに登用したという。院長であった若栗章は医学教場教頭となり、副院長であった生田安宅は二等助診駆梅院長（のち一等助診）に降格となった一方、神戸でクリスチャン医師となり帰郷していた先述の大田源造がベリー属に、旧藩時代からの医員二名がベリー随診に任じられた。人事改革への不満は大きく、ベリーも回顧するように、*「M.I.、すなわち生田を中心とした医員の不満がストライキなどのかたちで噴出した。」*⁽⁴²⁾六月からベリーが避暑・病氣を理由に神戸に戻ると、生田を議長としたコレラ予防対策のための臨時会議が開かれ、その場において大田ら三名のベリー属は病院を辞職した。若栗院長は七月に病院を離れ、生田が院長心得となった。そして十月になると、次章に述べるように生田による人事面での抜本的反撃が開始されることとなるのである。

一八七六年に県当局からの勤務評定を病院側が阻止した経緯をみても、院内には自律性を重んじる風潮が強く、独断的なベリーの人事に反感がつのったのではないか。テイラー招聘が頓挫し、病院はロイトルの解雇から約八年を日本人医師だけでやりくりしてきたのであり、外国人から頭ごなしに改革されることへの抵抗が強かったものと推察できらる。

九月に岡山に戻ったペリーは、月末から週三日間午前診察、週一日は紹介患者の診察と医学上の質問受付、その他往診と自宅診察を行うというかたちで仕事を始めた。医員の私宅での診療は、就任後の五月から許可されていた。着任後約一年を経た時点での診察状況を見ると、岡山県病院全患者一万四千九百三十名のうち、ペリーが治療したのが二千八百名、ペリーが私宅で治療したのが千二百四十二名で往診患者が七百九十五名とされている (SR-2 1880.5)。日本で得た症例をアメリカの学会誌に発表することもあったペリーだが、ボード本部には特に、"immoral diseases" すなわち性病患者の割合が高く、僧侶の間にも蔓延していることを報告している ("Pioneer", Berry 1882.10.31)。

ペリーは伝道面に関しては、自尊心をもつ文明化された階層の異教徒と宣教師との間に宣教医が位置しようと考えていた。宣教師の下に足を運ぶのをいやがる彼らも、相手が医師ならば、中立的だと見て寄ってくる。彼らに一度近づくことができれば、後はたやすいというのである (Berry 1881.1.29)。弓之町旧県庁跡での病院新築にはじまり衛生問題や流行病対策、監獄改良問題にも助言を与える一方で、ペリーは神戸時代と同様に、周辺地域への医療伝道を練り広げた。現地の医師の関心と協力を取り付けてアウトステーションとしての伝道診療所 ("dispensary station") を設置し、それを教会設立へとつなげていく方法が、これまでに築き上げてきた彼のスタイルであった。中川横太郎も当初から各地での医療に期待しており、東京や横浜でキリスト教と接触した食客の長田時行を指名して五年間ペリーの補助者に任じるなど、協力的姿勢を示していた⁽⁴³⁾ (Berry 1878.11.20)。ペリーには、診察とともに現地の医師に医療を教授することも望まれ、テキストを配布し授業を開くこともあった。

一八八〇年五月までの診察患者数として、高梁五百十八名、総社百十八名、河辺百五十八名、西大寺七十九名、下津井六十七名、とのデータが挙げられている (SR-2 1880.5)。この数字にみるように、医療活動が最もスムーズに広がったのは、高梁であった⁽⁴⁴⁾。赤木蘇平や須藤英江・彌屋修平といった現地の医師たちはペリーに関心を寄せ、診療所

が開設された。後に社会事業家として知られる留岡幸助は、赤木の紹介でベリーの診察を受け、神の前にあつて、士族も町人も魂の価値は同一であるとのことばを聴いて入信を決意したという。一八八〇年二月にこの地を訪れた新島襄も、ベリーの患者百余名に説教をした。これが両者の初めての出会いであったが、ベリーは今まで会ったなかでもっとも“noble”な人物の一人だと評価している (Berry 1880:228)。ベリーは金森通倫と毎月一回同地に出張したが、診療所は一八八三年頃には私立高梁病院として、県にも認知される組織となった。

高梁での成功は、民権結社開口社によるところが大きい。最初から公立学校校舎での講話が許され、三百名の聴衆を集めたというが、県令の懸念どおり、政治演説会と抱き合わせるように伝道集会が開かれた結果だと考えられる。現地の商人にして民権運動家、初代の県会議員でもあった柴原宗助が結社の中心であり、赤木医師もそのなかの一人であった。高梁教会の誕生は一八八二年四月であったが、柴原や赤木はその日に洗礼を受けた。

当初、被差別部落伝道を除けば、すべてのアウトステーションはベリーの医療活動がきっかけとなって生まれた (SR-2 1880:5)。しかし、ベリーに同行する伝道者の不足や、移動には費用や許可が必要であることの制約、彼の再訪問までの間仕事を促進してくれる現地での人材に恵まれなければ無益であるとの判断により、アウトステーション開設活動は低調になっていった (Berry 1881:1.29, SR-3 1881:4.1)。実際、総社・河辺・下津井での伝道はその後発展しなかった。岡山県下においては、倉敷(天城)・笠岡・落合・牛窓などへと伝道の手が広がり、ベリーの医療訪問も行われたが、伝道の進展は必ずしもすべてをベリーの医療活動に負うものではない。

そもそもベリーは神戸在任期より、既設ステーションの充実よりも、新ステーションの開拓への志向を強くもった宣教師であった。一八八〇年十一月には、岡山ステーションの活動は今治の他、松山・尾道・福山・丸亀など他府県へも拡大しており、ベリーの関心は遠方に向けられるようになったと思われる (以下 Berry 1880:11.30)。岡山開設時

から他の有力候補として推していた広島に対するペリーの思い入れは強く、諸方面との地理的関係を考えても、当然活動対象地に組み込むべきだと考えていた。ペリーは今治教会の伊勢時雄とともに、広島を訪ねた。ここにはかつて官立広島英語学校で教鞭を執っていたカロザース (Carrothers, Christopher) が与えた影響が残っており、礼拝は守られていなかったが聖書を読む習慣を持つ人々が四名残っていた。一人は戸長で一人は医学校生徒だったという。県当局から温かく迎えられたこともあり、広島に活動を広げることがペリーは強く希望した。また九州伝道の拠点としてかねてから有望視されていた福岡の私立病院にも宣教医の派遣が予定されていた (Berry 1882.10.31)。

従来ペリーが監獄改良について内務卿大久保利通に進言したことはよく知られてきたが、政府高官へのもう一つの働きかけが、駐日米公使ビンガムと外務卿井上馨に対する一八八一年十二月から翌年二月にかけての外国人宣教師の居住権・内地旅行権の拡大要求である。(Berry 1881.12~1882.2) これは結局実現なかったが、彼の新ステーション設置への意欲をうかがい知ることのできる行動である。

四 岡山県とアメリカン・ボードの分離

1 民権運動の影響

アメリカン・ボードと岡山県との結びつきは、中川横太郎や西穀一をはじめとする県内有力者と、これに協調する高崎五六県令によって維持されていた。彼らは宣教師のよき協力者であったが、信仰という観点からみたときには、当初から限界も有していた。ステーション設置前からそれに敏感であったのはアッキンソンである。彼は一八七七年に初めて岡山を訪れた際、中川はクリスチャンと呼べるとは思わないと評していたし、在米中に受洗していた能勢に

についても、活きたクリスチャン ("live Christian") ではないと見ていた⁽⁴⁵⁾ (Atkinson 1877.9.4)。また彼らの妾をもつ風習は宣教師たちの強く気に病むところであり、従来指摘されてきたように、外来知識のみを求めたり、福音を理解することなく洗礼を受けたりする流行的なキリスト教への接近は、宣教師がもともと警戒するところであった (Missionary Herald 1881.1)。

有力協力者らは、家族を礼拝に出席させることには躊躇がなかった。西の家族は礼拝に出席し⁽⁴⁶⁾ (Petree 1882.9.30)、中川の妻は入信、妾の炭谷小梅にいたっては後に名を残す伝道者となる。しかし彼らは、自ら受洗に踏み切ることはしなかった。こうした傾向は、例えば神戸にてキリスト教界への援助を惜しまなかった旧三田藩主九鬼隆義にも共通している。この点、キリスト教へのスタンスに一種の共通性をもつものの、本稿に挙げた土倉や能勢のように、彼ら地でいともたやすく受洗した多くのアメリカ留学体験者の選択とは対照的である。

宣教師が雇用された一八七九年は、岡山の民権運動が独自の国会開設要求運動として最高潮の盛り上がりを見せた年である。⁽⁴⁷⁾ 西こそがその中核であり、十月に彼が起草した国会開設建言書は、高粱にて中川の目に通された。翌年に入ると彼らはむしろ、児島湾干拓を手がける徴力社の結成や岡山紡績所の設立など、士族授産策の方に力を入れるようになったのが実態だと思われるのだが、その頃からケリーは、中川がキリスト教に関わることを避けて政治の喧騒に再び巻き込まれたと、無念々を表している (Cary 1880.10.23, SR-3 1881.4.1)。宣教師は、自らは政治からは距離を置くことを表明しているが (Cary 1880.4.30)、民権運動家とこれを牽制する県令との間の対立の間にあつて、双方との良好な関係を維持することを願ったゆえでもあつたと思われる。政治的活動は、キリスト教に目が向く時間が奪われるという点でも、無用な対立を生むという点でも宣教師にとっては好ましくなかったに違いない。有力協力者たちがキリスト教と決別したというよりは、岡山教会員という核となる支持者を得つつあつた宣教師の側が彼らに見切

りをつけ始めたものと解釈するのが妥当であろう。

2 官学医学教育体制の流入

アメリカン・ボードの岡山伝道が本格化した一八七七年は、国の高等教育体制が東京大学を軸として整備され始めた時期であった。そしてそれがアメリカン・ボードと岡山県との関係をも規定していくこととなった。

一八七七年四月、大学東校以来の系譜をもつ東京医学校と東京開成学校が合併して東京大学が創設され、医学部に医学教育が行われることになった。その前年には、成業の後、各地方病院にて勤務することを条件に学資を給付する官費生制度が内務省により導入されていた。東京大学医学部卒業生は、各地の病院に赴任し全国的な医療レベルを引き上げることを期待されたのである。

この東京大学体制成立の影響が岡山に及ぶのは、一八七九年十月のことであった。五月のペリーの人事改革において対立関係にあった生田安宅が、清野勇を第三代病院長に招いたのである。⁴⁶ 清野は駿河出身で、蘭学を修めた後、大学東校を経て東大に学び、医学士の資格を得ていた。

一八八〇年九月、県病院から医学教場が分離され、岡山県医学校と改称された。このとき、東京大学医学部を卒業したばかりの菅之芳が校長兼病院副院長として着任した。一八八二年一月には東大出の医学士四名（清野・菅のほか山形仲芸と中浜東一郎）と製薬士一名（吉田学）を擁し、岡山県医学校は有数の医学教育機関になった。一八八二年四月には全国で初めて、卒業生が開業試験を経ずに開業免状を得る許可を得ており、翌年八月には、甲種医学校としての認可を受けている。実現はしなかったが、医学士らによる大学昇格運動も起さるほどであった。

清野院長の下で、病院の運営方法は一新された。彼は従来の教員生徒を入れ替えて、ドイツ語を基礎とした教育を

導入し、ペリーも解雇しようとした。ペリー雇用への口出しを越権行為とする高崎県令とは激しいやり合いとなったが、書記官の仲裁によって収拾し、ペリーは病院勤務を続けた。しかし院内では経費についてもその都度県の承認が必要で、“freedom enjoyed in Kobe”——すなわち神田県令の下で財政的な裁量も与えられた神戸病院時代に比べたときの不自由さが痛感され (Berry 1881.1.29) 、次第に病院顧問としてのペリーの医療活動は、個人宅での診察が中心となっていた。

ペリーはすでに神戸時代から、懷疑論や無神論に傾くドイツ流医学の流入への危機感を示していたが、実際の医療行為においては、ドイツ系と英米系との違いは少ししかないとの認識があり、ドイツ人教師の教えを受けた官立学校の卒業生たちは、アメリカの大学生よりもっと医学に習熟してゐるとも認めている (Berry “Medical Work” 1874. 10-114, 1881.9, 6.18)。ペリーは、神戸時代や岡山時代当初と比べ、三年程前から院内に外国人の意見を聞こうとする態度がなくなり、珍しい症例のときのみしか意見が求められなくなったと報告するとともに、院内医員が自分を超える千五百〜千八百円の報酬を得ており、知識も野望も増した結果、外国人に頼らず自力で行いたいとの欲求が起これるのだと捉えた (Berry 1883.12.6, 7.25)。また背後には、急進的な政治上の著作などに近づく危険があるとして、官僚が英学教育のかわりにドイツ学研究を奨励している状況があるとも指摘している (Berry 1883.1.20)。彼はこれが自然かつ不可避の事態だと理解していた。つまりは、学問内容としてのドイツ医学への抵抗感というよりも、国レベルでの政策を直接反映した県病院におけるヘゲモニー喪失への失望・無力感が強かったものと考えられる。

以上のようなことから、岡山県病院・医学学校は、神戸病院のような伝道拠点とはならなかった。ここで教育を受けた人物の一人に石井十次がある⁽⁴⁹⁾。一八八二年九月に入学、カトリックを経てプロテスタントへと転会し岡山教会で受洗する。受洗前にケリーの説教を聴いたり、後年に孤児院活動を通じて宣教師ペティーから大きな影響を受けたりし

たことは認められるものの、医学校在籍時に接触の機会に恵まれていたはずのペリーから薫陶を受けたという形跡はない。また、石井のなかでは、プロテスタント・キリスト教への帰依とドイツ流医学の習得とは矛盾せず、双方に日々励む生活を送っていた。ペリーが抱くドイツ医学に対する対抗心は、医学生への信徒に共有されるわけではなかった。

清野や菅のキリスト教への接し方を直接示す史料に乏しいが、後に菅宅に寄宿しながら医学修業を続けた石井は、菅に聖書の話をしたところ、医学書生としての分を尽くし他人にまでみだりに伝道しないようにと諫められたり、靈魂が天国に行くとの話を嗤笑されたりしたことを書き残している。⁽⁵⁰⁾ペリーが岡山を去ってから約半年後に、石井は医学校生徒六名が開いた祈祷会に陪席したと記しているから、⁽⁵¹⁾医学生中に信仰者がいなかったわけではない。しかし例えば札幌農学校のように、学校自体が信徒を輩出し地域伝道を担うような伝道拠点の役割を果たすためには、教員側の理解者が不可欠なのであり、岡山医学校はそうした人材を欠いていた。

3 雇用主体の変化

ペリー・ケリー・ペティーが岡山県公立病院あるいは私立池田学校と雇用契約を交わしてから五年が経った一八八四年は、契約の更新年に当たっていた。そして結論からいうならば、宣教師自身の判断により契約は更新されなかった。しかし彼らは岡山ステーションすなわち岡山伝道自体を放棄しようとしたわけではない。外務省の記録によれば、彼らは別の民間人との間に五年間の私雇用契約を新たに交わし、引き続き岡山に在留する根拠を得ている。ここに、彼らの伝道戦略の変化を読み取ることができる。

まず、ケリーとペティーであるが、着任後約三年が経つと、原泉学舎での仕事を辞めてクリスチャンの保護の下に新しい学校を設立するのが最良であるとの見解を示すようになっていた。前述した中川らの民権運動への入れ込みよ

うにより、原泉学舎をキリスト教主義の学校としていく見込みが見失われたことによるのだろう。新しい学校の目的は、他の学校での授業の補習として英語を一時間程度教授するということであり、場所は教会が予定されていた⁽⁵²⁾ (Cary 1882.4.1 SR-5 1883.4.1)。

またベリーも、岡山県病院での日々を、直接キリスト教の仕事と関わることがなかった不幸な経験であるとし、別のかたちでの関係を築くかあるいは別の地に移るかすることで、キリスト教の影響下にある仕事をしたいと切望するにいたった。高崎県令からは引き続き五年間の居住免状と住居手当の交付が申し出られたが、宣教師が公立病院と連携する時代は終わったと認識するベリーは、それを断っている。彼によれば、永続的な岡山のクリスチャン慈善組織 (“Benevolent Association for the Okayama Christians”) をつくり、そこに自分の管轄による医学部門を設置するという構想を立てていたという (Berry 1883.7.25)。これはおそらく、ケリー・ペティーの学校設立案と一体のものであり、この有志連が語学教育と医学教育を行いながら伝道を進めるといふ計画だったと思われる。

彼らの新たな雇用主として記録されている名前は、丸毛真心・吉岡正矩・撮(税)所信篤・福家篤男・徳田紋平である⁽⁵³⁾。すべて岡山教会の教会員であり、ベリーのいう慈善組織とは、教会員の集団のことであつたと考えられる。ケリーとペティーは授業料に応じて給与を受けるといふ条件で、ベリーは無給医師として、彼らと契約を結んだ。県病院や私立原泉学舎との関係はここに終わりを告げた。岡山県において、宣教師の連係相手は、協力的な府県や地元支持者から純キリスト者である教会員へと移つたといえる。

教会員が宣教師を雇用するかたちで独自の病院を発足させるという計画が直ちに実現することがなかったのは、ベリーが一八八四年三月、帰国の途に着いてしまったことが大きかつた⁽⁵⁴⁾。帰国の理由は、鼻の手術の必要など健康上の問題にあつたともいわれるが (“Pioneer”)、一八八二年秋から新島襄との間で具体化していった、同志社に医学校を設

置する計画の実現に向けての準備のためでもあった。この医学校構想については、同志社および京都府との関係、あるいはキリスト教界内部に生じた意見対立の問題として考える必要があり、改めて分析したい。⁽⁵⁵⁾ただ彼は、公教育機関には若者を惹きつける強い力があると認めており (Berry 1883:11.17)、それ以上の影響力をもつ私立医学校を設置すべきこと、しかもそれは日本人による機関でなくてはならないと認識していたこと (Berry 1883:5.24) を指摘しておこう。岡山県病院における東大卒業生らとのヘゲモニー争いに直面した局面で新島との出会いがあったことで抱きえた新構想だったといえる。ペリーは、宣教医の仕事を支えるためには教会がまだ少なすぎるし若すぎると考えていた (Berry 1883:7.25)。岡山教会員との計画は気にかかるころではあっただろうが、京都での同志社との計画に現実的戦略を見出し、こちらを優先させたものと思われる。

高崎が設けた送別の席においてペリーは、日本での改革は世界に類を見ない迅速さで行われている、しかし不可避的に吸収される西洋の悪のなかにゆゆしき危険性ははらまれているのであって、日本を救うためには有効な道徳的影響力が作用しなければならぬと挨拶した ("Pioneer")。これは明らかに岡山県病院での挫折体験を念頭においた総括であり、私立の同志社医学校設立こそが、岡山を去る彼の次なる夢となったのである。

おわりに

明治前期において、医学と洋学双方の発展のために宣教師が登用された府県は、全国的にみても稀である。岡山でそれが可能となった背景や、宣教師との関係の結び方の特性をまとめてみよう。

医学教育においては、近代化を図る四つの主体があった。①県病院の実質的担い手であった旧藩医層 (生田安宅ら)、

②キリスト教勢力アメリカン・ボードの宣教医（ペリーら）、③内務官僚である県令（高崎五六）、④東京大学医学部卒業生（清野勇・菅之芳ら）、の四勢力である。①は以前より西洋医学の摂取に積極的であったから、②に接触し宣教医テイラー招聘を試みたがこれは実現しなかった。後に③が②の招聘を積極的に進め県の病院での雇用が実現した。だが①と③との間には摩擦が生じており、③の後ろ盾を得た②による人事改革は、①との対立を招いた。①は④を導入していくことで病院運営の刷新を図ったため、②は排除されることとなった。

このように岡山県では、医学の領域において近代化を模索する多様な勢力がからみ合っていた。各勢力の協調や対立は、近代化方策をめぐる協調と対立の過程であったといえる。

一八七〇年代半ばにおける兵庫県のケースと比較してみよう。神戸病院は岡山の公立病院とは異なり、旧藩学の系譜にはなく、居留地との関連から新設された県の病院であった。神田県令（③）によりペリーが登用されて県内医学のレベル向上が図られたが、続く森岡県令（③）によって各地の公立機関で医学を修得した日本人とオランダ人医師とが登用され、居場所を失ったペリー（②）は病院を去った。岡山県には、②③の關係のみで理解できる兵庫県と異なり、病院内に旧勢力（①藩医層）と最新勢力（④東大卒業生）が存在していた。両者が結びつき、そのはざまのキリスト教医学勢力（②）を追い出した格好になり、ペリーはより直接的に排除の感覚を味わったものと考えられよう。

一八六二年に個人診療所を開き、日本における医療伝道の創始者ともいえる横浜の長老派宣教師ヘボン⁽³⁶⁾は、一八七八年四月に「医療伝道を復活することはどうしようかと迷っています。すでにその必要がないようですから」と記しており、健康上の理由も加わって、医療伝道を中止した。ペリーが岡山県公立病院と契約を結んだのはその頃であって、やがて医療伝道の時代の終焉を身をもって知ることとなる。ペリーとヘボンとが医療伝道断念にいたるまでの数年の時間差は、ペリーが岡山という地方都市に滞在したため、中央官庁による医療教育制度の整備状況を体感するのが若

干遅れたこと、個人診療に終始したヘボンとは異なり、公立病院に入って地方政府との友好関係を結び周辺地域への伝道を実現するという医療伝道スタイルをとったことに起因するといえよう。

対する洋学教育についていえることは次の通りである。洋学教育においては、前述の①④という勢力が不在であった。①にあたる洋学教育機関の担い手はすなわち、⑤士族有力者層（中川横太郎・西穀一ら）であり、旧藩時代からの漢学者は排除されていたし、この教育領域においては、まだ④の官学教育の伝播もなかったからである。②にあたる宣教師ケリー・ペティーの招聘は③の下の師範学校と⑤の下の池田学校において期待され、後者において実現するが、③と⑤の関係にひび割れをもたらす民権運動下であって、②と⑤との関係はやがて疎遠になった。

兵庫県が医療方面の連携にとどまっていたのに対し、旧藩時代から洋学教育実現への胎動があった岡山県では、宣教師が洋学教育にも登用された。その場合は公立機関ではなく士族有力者が藩主資金を元手に発足させた私立池田学校となった。ただ、民権運動下にこの学校の性格には危険視されるところがあり、県令の全面的支持は得がたかった。宣教師自身にとっても、池田学校を活用した教育と伝道自体は副次的目的にとどまっていたと思われる。この学校に雇用されることは岡山在住の根拠を得るための方便であり、力点は新設の岡山教会を拠点とした伝道拡張に置かれていた。そうしたそれぞれの意図の上に成り立つこの学校は、「私立学校」として未成熟だったのであり、双方の関係は当初よりあやうさを抱えるものであった。⁽⁵⁷⁾

地域有力者が運営した池田学校には、冒頭に述べた一八八〇年代後半の東華学校が有する地域との連携形態と、共通性がみられる。しかしアメリカン・ボードが、独自の「私立学校」設立計画の発動、および洋学教育の領域における地方政府との連携という伝道戦略の認識にいたるには、新島襄に主導される京都の「私立学校」同志社がこの問題の表舞台に登場してこなければならなかったし、府県側の中等教育実施態勢の充実をも待たなくてはならなかった。

本稿で取り上げた、岡山におけるペリー・ペティー・ケリーの雇用契約は、一八七九年から一八八四年までの五年間であったが、これはアメリカン・ボードと日本側の公権力である府県との間での、医学における連携の終焉期であり、洋学における連携の萌芽期であったと結論付けられる。

ペリーが一八八四年三月に岡山を去ったことは、アメリカン・ボードが医療面における地方行政府との連携を断念したことを象徴する画期的な事件であった。ペリーが再来日して京都での活動を始めたのは、一八八六年一月のことである。岡山在住時代、新島襄との接触により抱いた医学校設立構想は、紆余曲折を経て同志社病院と看病婦学校の設立として帰結する。この経緯はどのような意味をもつのか。稿を改めて検討することとする。また先述の①⑤は、他の府県における医学・洋学教育体制形成過程とキリスト教界との関係をみる折にも参照しうる指標であると思う。しかし、いずれも考察を深めるべき余地を多く残しており、後日、枠組みとして洗練させたい。

註

(1) ただし本稿でいう「洋学教育」とは、女子教育を含まないものとする。キリスト教界と公権力の関係をみる上で、女子教育は別個の問題として考えるべき重要なテーマである。後日を期し、本稿では必要に応じて注で触れるにとどめたい。

(2) アメリカン・ボードは、一八七〇年以來、最も広範かつ組織的に対日布教を進めた宣教団であり、公権力との関わりも組織的で深かった。他の宣教団については、個々の宣教師の単独行動という性格が強くなるが、一八七六年より静岡県病院に雇用されたカナダ・メソジスト教会のマクドナルド、一八七四年から東京英語学校、一八八七年からは若手県尋常中学校に勤めた経歴を持つイギリス・バプテスト派のポルト、一八八八年に金沢の第四高等中学校に着任したカナダ・合同教会のマッケンジーなど、諸教派の宣教師が公教育に関与している事例を見出すことができる。

また、キリスト教勢力を受け入れる公権力の側については、公立学校を運営する諸府県の他に、文部省の管轄下にある各地の官立学校がある。一八七四年に全国七ヶ所に発足した官立英語学校は、宣教師の職場となりうる可能性の高い学校であった。前述のポルトの他にも、一八六九年から新潟英語学校で教鞭を執ったアメリカ改革派のブラウン、広島英語学校に着任

したアメリカ長老派出身のカロザースがいる。英語学校以外でも、一八七〇年代の東京大学前身校においてはフルベッキ以来、改革派を中心とする宣教師が相次いで雇用されているし、キリスト教の流入に神経質であったイメージの強い官立学校も、キリスト教勢力との関係が意外に深いことがわかる。あまりにも有名な札幌農学校におけるW・S・クラークに代表されるような、平信徒の活動も視野に収めるならば、なおさらそういえるだろう。大阪の官立英語学校も、平信徒として熊本で多くのクリスチャンを養成したことで知られたジェーンズを雇用しているのである（拙稿「第三高等学校前身校とキリスト教」『日本歴史』第六四三号 二〇〇一年）。

(3) 以下神戸病院については、拙稿「明治初年の神戸と宣教医ペリー——医療をめぐる地域の力学」(『キリスト教社会問題研究』第五二号 二〇〇三年)。

(4) 東華学校については、本井康博や太田雅夫らの研究がある。本井「宮城英学校——新島襄と押川方義」(『新島研究』第八〇号 一九九一年)、太田「宮城英学校設置申請書」(桃山学院大学教育研究所『研究紀要』第一一号 二〇〇二年)など。

(5) 竹中正夫「岡山県における初期の教会形成」(『キリスト教社会問題研究』第三号 一九五九年)

(6) 守屋友江「アウトステーションからステーションへ——岡山ステーションの形成と地域社会」(同志社大学人文科学研究所編『アメリカン・ボード宣教師 神戸・大阪・京都ステーションを中心に、一八六九—一八九〇年』教文館 二〇〇四年)。守屋の研究は、岡山ステーションの活動を、アメリカン・ボード西日本伝道の発展過程や在地仏教界の動向に留意して描き出した点で竹中の研究を進展させている。宣教師文書に依らない岡山伝道の考察としては、竹中以前の業績である工藤英一「明治初期岡山県プロテスタント伝道史の社会的考察——天城教会を中心として」(『明治学院論叢』第三三三号 一九五四年)、比較的近年の一色哲「キリスト教と自由民権運動の連携・試論——岡山と高梁を事例に——」(『キリスト教社会問題研究』第三号 一九九四年)がある。

(7) 本稿で検討する宣教師文書は、ペリーの他、岡山伝道に関わったテイラー・アッキンソン・ケリー・ペティーがボストンのアメリカン・ボード本部に宛てた報告書簡類である(同志社大学人文科学研究所蔵マイクロフィルム「アメリカン・ボード宣教師文書」所収。アッキンソンのみ同志社大学総合情報センター所蔵マイクロフィルムより)。なお、年次ステーションレポートとケリー書簡については、同志社大学人文科学研究所「アメリカン・ボード宣教師文書研究」研究会における柴田陽子・守屋友江の和訳があり、活用させていただいた。記して感謝したい。

(8) 岡山県の医学教育については、中山沃が史料を網羅して詳細に研究している。「岡山県病院略史」(『日本病院協会雑誌』一八六八年一月—四月)、『岡山の医学』(日本文教出版 一九七一年)等の論考があるが、岡山大学医学部百年史編集委員

- 会編『岡山大学医学部百年史』（一九七二年）の記述が集大成となっており、史料所蔵先が明記されていないうらみはあるが、本稿も多くを負っている。
- (9) ロイトルは、医学生時代の教師であり叔父にあたるボードインの斡旋により、岡山藩医学館に就職したが、契約三年のうち一年を終えたところで岡山を去っている。「岡山県史料」（『岡山県史』第三十巻 教育・文化・宗教〔岡山県 一九八八年〕）はその理由を病のためとしているが、石田純郎は解雇の原因として、酒乱癖を指摘している（ハラタマ、レーウエン、ブツケマとロイトル——ウトレヒト陸軍軍医学校の同窓生たち——『医学近代化と来日外国人』世界保健通信社 一九八八年）。
- (10) 岡山県教育会『岡山県教育史』中巻（一九四二年）所収。
- (11) 岡山県の洋学教育については、前注『岡山県教育史』中巻が基礎史料を含む貴重な叙述である。概説としては、ひろたまさき・倉地克直編著『岡山県の教育史』（思文閣出版 一九八八年）がある。
- (12) 二年契約で雇用され任期を残していたオースポンは明治五年四月をもって学校を去り、十月からは神奈川県雇として長く翻訳・通訳に従事することとなった。
- (13) 小松原英太郎君伝記編纂委員『小松原英太郎君事略』（一九二六年）
- (14) 小林久磨雄『西薇山』（薇山先生追讃会 一九三二年）
- (15) 「私雇外国人居留地外住居許否雜件」（外務省外交史料館所蔵『外務省記録』30733）。宣教師雇用をめぐる国と県との緊張関係がわかるとともに、池田学校の実態がうかがわれる重要史料である。
- (16) ちなみに「公立」と「私立」の区分が明らかにされたのは、一八七四（明治七）年八月二十九日の文部省布達二十二号によってである。同布達は、学校を官立学校、公立学校、私立学校の三種類に区分し、官立学校は「当省定額金ヲ以テ設立シ、直チニ管轄スルモノ」、公立学校は「地方学区ノ民費ヲ以テ設立保護スル者、又ハ当省小学委託金ノ類ヲ以テ学資ノ幾分ヲ扶助スルモノ」、私立学校は「志人或ハ幾人ノ私財ヲ以テ設立スルモノ」と規定した。
- (17) 能勢の経歴については、多田房之輔「マスター、オブ、アーツ 正七位能勢栄君小伝」（『大日本教育会雑誌』第一七四号 一八九六年二月）、授業の様子については前掲『岡山県教育史』中巻を参照。能勢は一八八〇年八月に岡山県を辞し、学習院・長野県・福島県を経て一八八七年二月からは森有礼の下で文部省に奉職する。アメリカから一八七六年九月に帰国してすぐに岡山県に赴任した理由はよくわからないが、あるいは東京漫遊中の西や中川に出会って同地に導かれたとも考えられる。

- (18) 前掲『岡山大学医学部百年史』所収。
- (19) 長崎医学校・病院は、一八七四年十一月から文部省の下を離れ蕃地事務局病院となっていた。一八七五年から再興論が起り、一八七六年から長崎県管轄の長崎医学校となる。一八七五年からは蘭医リーウエンが雇用されている（長崎大学医学部編『長崎医学百年史』一九六一年）。
- (20) 以下、飾磨県状況については、拙稿「J・C・ベリーと伝道診療所——兵庫・飾磨県下における地域社会と医療宣教師」（前掲『アメリカン・ボード宣教師』を参照）。
- (21) この往復文書は、大久保利武編『日本におけるベリー翁』（東京保護会 一九二九年）の「巻末余滴」に所収。
- (22) この人物は、"one of the third officers of the ken, -there are five or six of the same rank" だとのみテイラーは記している。同年三月の官員録によると中属（全五名）の地位にある中川である可能性が高い。なお、以下典拠となる宣教師文書は、表記のように発信者と発信日を本文中に示す。ステーションレポートについてはSRと略す。
- (23) "Governor" が最高位の参事職にあった石部、"Vice Governor" が権参事の西と推定した。このとき、中川とは別の「三番目の地位」の役人もテイラーを迎えたというが、テイラー書簡のみから人名を特定することは難しい。官員録に名が挙がっている中属の一人だとするならば、西らとともに後に池田学校を設立した青木秉太郎、税所篤、大口精蔵あたりだと思われる。
- (24) 土倉については、石附実『近代日本の海外留学史』（中公文庫 一九九二年）所収の「海外留学者リスト」などによる。
- (25) 岡山県史編纂掛編『岡山県史稿本』下（岡山県地方史研究連絡協議会 一九六七年）、前掲『岡山大学医学部百年史』所収史料による。
- (26) 鈴木とは、鈴木清である可能性が高い。彼は三田出身で、彦根をはじめ各地に伝道していたという（茂義樹『明治初期神戸伝道とD・C・グリーン』新教出版社 一九八六年）。このとき"the principal of High School" が親切にも礼拝用に家を提供してくれたというが、この学校の特定はできない。県の温知学校ならば木畑道夫、私立遺芳館ならば青木秉太郎であろうか。西らと親しかった青木の可能性が高い。
- (27) 注(3) 拙稿参照。
- (28) 前掲『岡山大学医学部百年史』
- (29) このときはアッキンソンが旅行免許を持っており、それにベリーが随行するという形での旅行であったとこう(Berry 1878, 11-20)。アッキンソンは医師免許を持たないため、春からの内地旅行に際しては学術研究や病気療養を理由として免許を申請していたはずであるが、その経緯は不明である。宣教師の雇用や内地旅行をめぐる問題を、国の規程下にあつて府県がど

のように処理したのかは、考察を深めるべき問題である。

- (30) 前掲『岡山大学医学部百年史』
- (31) 内藤正中『自由民権運動の研究』（青木書店 一九六四年）、『岡山県史』第十巻 近代Ⅰ（岡山県 一九六二年）
- (32) Berry, Katherine 『The Pioneer Doctor in Old Japan: The Story of John C. Berry』 (Fleming, H. Revell Company 1940) の『Okayama』の章。以下“Pioneer”と略し、本文中に注記する。
- (33) 前掲『岡山県教育史』中巻所収史料による。
- (34) 前掲「私雇外国人居留地外住居許否雑件」。契約書もここに含まれる。
- (35) この学校は公立師範学校に附設された女紅伝習所か、岡山区内に二箇所あった私立の女子手芸学校かと推定されるが、特定できない。翌年ウィルソンは心身の健康を害し帰国、同一八八〇年九月からはダッドレーが岡山伝道に加わるが、彼女も岡山での雇用契約は確認できない。なお、ベリーの雇用当初から、現地では中川が女学校を新設する夢をもっており、ここに女性宣教師を登用したことを考へた (Cary 1879:5,24)。
- (36) 『新島襄全集』5日記・紀行編（同朋舎出版 一九八四年）
- (37) 河本乙五郎「ベリー翁の事ども」（前掲『日本におけるベリー翁』所収）
- (38) 「新島襄との交渉」（久米竜川編『中川健忘齋逸話集』岡山県人社 一九三七年）、一八七九年二月十日中川より新島宛書簡（『新島襄全集』9へ上へ）来簡編（同朋舎出版 一九九四年）
- (39) 一八八〇年二月二十五日新島襄より新島八重宛書簡（『新島襄全集』3書簡編Ⅰ（同朋舎出版 一九八七年））
- (40) 前掲『西薇山』。池田家からの学資金が停止された理由は不明である。
- (41) 病院内の動きについては多くを前掲『岡山大学医学部百年史』に負う。
- (42) 伝記“Pioneer”では、あまりこの騒動について触れておらず、生田を匿名で挙げた日記を抜粋引用するにとどまっている。
- (43) 長田については、本井康博「長田時行小伝（上）——新潟教会第十一代教師——」（『潟』第一〇号 一九九三年）。
- (44) 高梁の状況は、『高梁教会八十年史』（高梁教会 一九六二年）、柴多泰『明治前期高梁医療近代化史』（高梁市医師会 一九八八年）のほか、先行諸論文にも詳しい。留岡の回想「ベレー師と私の発心」は前掲『日本におけるベリー翁』所収。
- (45) ベリーは、中川がアッキンソンによってキリストへと導かれたと述べている (Berry 1878.11.20)。¹⁾ ベリーは希望的観測に基づいて本部への報告を記す傾向があり、その点において、アッキンソンとは好対照をなす。
- (46) かつて“vice governor”であった漢文教師で、個人的友人である新島襄ともキリスト教について話し合い、家族は礼拝に出

席していたとあり、西毅一のことだと推定できる。

(47) 前掲『自由民権運動の研究』、『岡山県史』第十卷

(48) 前掲『岡山大学医学部百年史』

(49) 石井の経歴については同志社大学人文科学研究所以室田保夫・田中真人編『石井十次の研究』（角川書店 一九九九年）巻末年表を参照。

(50) 『石井十次日誌』明治十九年（石井記念友愛社 一九七三年）の一月三、九、三十一日。

(51) 『石井十次日誌』明治十七年（石井記念友愛社 一九七〇年）の十月十九日。参加者として、瀬尾・水川・杉山、大田、武田、野津の名が挙がっている。

(52) なお、一八八四年七月に原泉学舎は閉鎖された。

(53) ユネスコ東アジア文化研究センター編『資料御雇外国人』（小学館 一九七五年）の「ケアリー」「ピター」「ペット」「ベリー」の項を参照。それぞれの雇用主は、ペリーが丸毛・福家・徳田、ケリーは吉岡・丸毛、ベティーは吉岡・税所・丸毛である。この雇用主の違いが何を反映した結果なのかはわからなかった。丸毛・吉岡は岡山教会設立の日に受洗し、教会執事の職に就いた丸毛は、一二年間ケリーの日本語教師を務めていた（Petec, 1882, 9, 30）。税所は『岡山県郡治誌』上（岡山県 一九三八年）によると、県官として郡長を歴任した（一八八二年五月、英田郡長、一八八三年三月、上道郡長、一八九二年七月、御野郡長）。

(54) ただし学校の方は、一八八六年十一月に私立山陽英和女学校が開校し、女子教育機関として実を結ぶ。発起人の岡山教会員中には、税所・福家・丸毛なども名を連ね、ケリーやベティーも教鞭を執る。また一八八八年には同志社進学予備教育機関としての役割を果たした男子英学校が発足する。これらは別に考察する必要がある。

(55) 京都での活動については、小野尚香による「医療宣教師ペリーの使命と京都看病婦学校」（前掲『アメリカン・ボード宣教師』所収）などがある。

(56) 一八七八年四月十七日ヘボンより改革派本部ローリー宛書簡（高谷道男編『ヘボンの手紙』有隣堂 一八七六年）

(57) この点、旧藩校の系譜を引く青森の私立東奥義塾が、一八七〇年代前半からアメリカ・メソジストの宣教師イングを登用して洋学教育を充実させたことは、突出した事例として目を引く。この学校については、北原かな子『洋学受容と地方の近代』（岩田書院 二〇〇二年）がある。